

## ハワイアン・ルネッサンスを訪ねる旅

東海大学国際学部国際学科 GLOBAL STUDY TOUR A 報告書

内川明佳<sup>\*1</sup>・小貫大輔<sup>\*2</sup>

はじめに

1. 伝統航海カヌー・ホクレアとアーイナ（土地・大地）に根ざした教育
  2. アーヌエヌエ学校の「オリ」とハワイ語
  3. カーネヴァイのタロイモ畑、ポリネシアカルチャーセンター、ビショップ博物館
- おわりに ハワイアン・ルネッサンスとは

はじめに

2025年2月17日から22日まで（5日間と23日は移動日）、東海大学国際学部国際学科のGLOBAL STUDY TOUR Aの授業の一環として、米国ハワイ州のオアフ島を訪れ、「ハワイアン・ルネッサンス」と呼ばれる民族運動の様子を見学しました。参加したのは、10人の学生（1年生7人、2年生2人、3年生1人）で、2人の教員（小貫大輔、内川明佳）が引率しました。全日程、ハワイ東海インターナショナルカレッジの寮に宿泊しました。この旅は、前年度（2024年度）の「アイヌ文化を訪れる二風谷（北海道）への旅」（2024年1月24日から27日（引率教員：小貫大輔、荒木圭子））に続く、「先住民族の言語・文化とその復興運動」について学ぶスタディツアーの第二弾でした。

### 1. 伝統航海カヌー・ホクレアとアーイナ（土地・大地）に根ざした教育

#### 1-1 伝統航海カヌー・ホクレア（Hōkūleʻa）

出発に先立って、私たちは、「ハワイアン・ルネッサンス」の歴史について学び、自己紹介などハワイ語のごく基礎的な知識を身に付けるなどの準備をしました。「ハワイアン・ルネッサンス」とは、ハワイの民族の誇りと文化、言語を取り戻すことを目指した運動です。1970年代にこの運動が始まったのをきっかけの一つに、「ホクレア（Hōkūleʻa）」という名のカヌーが太平洋を渡った航海があります。ホクレアは、コンパスなどの計器を一切使うことなく、星や太陽の動き、波や風の変化など、自然からのヒントのみを使って航海する双胴船です。ホクレアは、一度は失われたこの航海術を復活させ、ハワイからタヒチへの航海を成功させました。そのとき、一千年前の大海原を航海し、ポリネシアの島々を発見し移り住んでいた力強い民族のイメージが、人々の心にまざまざと甦ってきたのでした。

今回の旅は、ホクレアに出会うことを主な目的に計画したものでした。オアフ島での2日目の朝には、念願のホクレアとハワイロア（ハワイ伝統的な素材のみで造られたもう一つの双胴船）の出会いを果たしました。まず、日本人キャプテンとしてホクレアに乗るファネリアス多美子さん、陸のクルーとして支える岡田ヴィンスさんから、ホクレアの歴史や思想、使命について詳しく聞きました。お話の中では、「カヌーは島であり、島はカヌーで

---

投稿日 2026年01月29日 受理日 2026年01月29日

\*1 東海大学国際学部国際学科

\*2 東海大学国際学部国際学科

ある（He wa‘a he moku he moku he wa‘a）」という言葉がとても印象的でした。この言葉には、カヌーの上では互いに役割があり、ゴールがあり、そして思い合っていないと生活できないという意味が込められています。レクチャーの後、港に停泊しているホクレアに乗船までさせていただき、実際にクルーたちが海上でどのように過ごし生活しているのか説明してもらいました。



図1：(左) ついに会うことのできたホクレア、サンドアイランドに停泊している  
(右) ホクレアのレクチャーをしていただいた多美子さんとヴィンスさん

2025年5月、ホクレアは、太平洋の旅「モアナヌイアーケア（Moananuiākea）」に出発しました。フランス領ポリネシア、クック諸島、サモア、トンガを経て、11月にアオテアロア（ニュージーランド）に到着しました。メンテナンス後、アオテアロアを出発し、2027年には日本にも寄港することです。モアナヌイアーケアの旅を見守り、できることなら、その日本への到着を港に迎え、クルーが上陸する際に歓迎の行事に加わりたいのだと思います。

### 1-2 アーイナ（土地・大地）に根ざした教育（Āina-Based Education）

今回の旅で、あるとても大切な言葉に出会いました。「アーイナ（大地・土地）に根差した教育（Āina-Based Education）」という言葉です。引率教員の一人（小貫）は、1980年台にハワイ大学の大学院で学んだことがあるのですが、その当時には知らなかった言葉でした。スタディツアーの初日に訪れたハワイ大学マノア校のキャンパスでは、教育学研究科の大学院で学ぶ丸王祐子さんと金城初穂さんから、この考え方についてオリエンテーションをしてもらいました。



図2：ハワイ大学マノア校にて「大地に根ざした教育」について学ぶ

ハワイに住んでいるのに米国本土のことしか教えない教育は、ハワイで生きる人間をむしろ周辺的存在として定義してしまいます。ハワイの大地から湧き上がるエネルギーを直感し、その土地で培われた叡智と能力と人の輪を受け継ぎ、その学びをまた大地と人々に還元していく、「アーイナに根ざした教育」とは、そんな壮大な営みなのだと感じさせられました。国際学部で「世界」について学ぶ学生たちは、この言葉から衝撃を受けたようでした。「ハワイにまで来て、日本人として自分の文化を学ぶことの大切さを痛感した」、「自分が生まれ育った小さな田舎町のことを、誇りを持って語れるようになりたいと思った」といった発言が、毎日の夜の反省会で繰り返されました。

## 2. アーヌエヌエ学校の「オリ」とハワイ語

### 2-1 オリ (oli)

アーイナに根ざした教育の姿を象徴する、ある風景にも出会いました。3日目の朝、「ハワイアンイマージョン教育（どっぷりハワイ語に浸る教育）」、ハワイ語だけで（英語以外の）すべての教科を学ぶ学校を訪れた時のことです。緑豊かな溪谷パロロ地区にある「アーヌエヌエ学校(Ke Kula Kaiapuni 'o Ānuenue (Ānuenue School))」というその学校では、毎朝の始まりを「オリ (oli)」というチャントで始めるのでした。朝早く未だ白い霧が残る中、校庭で、真ん中には幼稚園児、そして外側に向かってより年齢が高い児童生徒が並び、高校3年生までの400人以上の子どもたちが、「私は学びの場に入る準備ができている」というメッセージを唱和する空間は、空気が揺れるような迫力でした。そして、子どもたちと向かい合い並んで立つ先生たちは、やはりチャントで「準備のできたあなたたちを迎えます」と応えます。動画を撮らなかったのは残念ですが、初対面でカメラを向ける気持ちにはならないような神聖な空気の満ちる場でした。

今日のハワイでは、民族の誇りを大切にする人たちの施設を訪ねたとき、「オリ」によって許可を求めるのが礼儀だと聞かされていました。ですから、私たちも基本的なオリを唱えることができるように準備していきました。オリの文言は長く、リズムや抑揚など簡単に素人が真似できるものではありません。幸いなことに、子どものときからフラを踊り、オリの経験もある学生がメンバーの中にいたので、彼女にリードしてもらうことができました。他のメンバーは最後の部分だけ合流して唱和しました。

### 2-2 ハワイ語の復活

アーヌエヌエ学校では、ごく当たり前にすべての会話がハワイ語で行われていました。校長先生（ババ先生）に走り寄って肩を抱かれながら話す小学1年生もそう。日系人の先生が教えるITCの授業もそう。上級生が下級生にバレーボールの指導をしているところもそう。私たちの滞在中、少なくとも先生と生徒の会話は授業外でもすべてハワイ語でされていました。

ハワイで最初のハワイアンイマージョン学校は、1984年のカウアイ島で生まれた幼稚園でした（‘Aha Pūnana Leo）。ハワイ州教育局のサイトによると、今日、ハワイ全州で25の州立学校と7つのチャータースクールがハワイアンイマージョン学校として開かれているとのことです（Hawai'i State Department of Education）。1995年に創設されたアーヌエヌエ学校は、州立学校としてはオアフ島で唯一、幼稚園児から高校3年生までが一つのキャンパスで学ぶ学校です。私たちが訪れた際にも、高校生が小学生にバレーボールを教える授業の様子も見学しました。

校長先生に聞くと、「ハワイ語がしっかり話せる人は、ハワイ全州で2万人から2万5千人くらいいるだろう」とのことでした。ババ先生自身は、大人になってからハワイ語を身につけたそうです。祖母がハワイ語で話していたので、子どものときから聞いてはいたけれど、しゃべれたわけではなく、ハワイ系の子どもを集める私立学校（カメハメハスクールズ）の高等部に通ったときも、必修選択の第二言語に日本語を選んだとのこと。ハワイ語という選択肢もあったけれど、観光業で働くには日本語の方が役に立つと思ったそうです。アーヌエヌエ学校は、創設30年にもなるので、今は、この学校で育ち、子どものときからハワイ語を話してきた卒業生たちが、たくさん戻ってきて先生として教えているとのことでした。19世紀の末に、学校での使用を禁止され、一度は死

に絶えたかにも見えたハワイ語が、今、イマージョン教育の力で復活を果たしつつあるのです。



図3：(左) アーヌエヌエ学校の校舎と中庭 (右) 校長先生と「カイマナヒラ」を歌う

アーヌエヌエ学校訪問の最後には、この日のためにウクレレを練習してきた学生の演奏に合わせ、パパ先生に、ダイヤモンドヘッドを意味するカイマナヒラ (Kaimana Hira) の歌を披露しました。パパ先生もウクレレを弾きながら一緒に歌ってくださり、最高の贈り物だと喜んでくれました。

### 3. カーネヴァイのタロイモ畑、ポリネシアカルチャーセンター、ビショップ博物館

アーヌエヌエ学校を訪れた後、3日目の午後は、ハワイ大学マノア校のカーネヴァイ (Ka Papa Lo'i Kānewai) にタロイモ畑を訪ねました。カーネヴァイは、カネ (神) とヴァイ (水) で、水の神を意味するそうです。タロイモは、日本の稲作のように水で浸された泥の中で育てるので、タロイモ畑というよりは、タロイモの田んぼで「ロイ・カロ (lo'i kalo)」と呼ばれています。ハワイ大学では、2007年にハワイ学部・研究科 (正確には、Hawaiʻinuiākea School of Hawaiian Knowledge、つまり「ハワイの知恵」学部) が設置され、ハワイ語だけで大学を卒業し、博士論文もハワイ語で書くことができるようになりました。カーネヴァイは、ハワイ学部・研究科の中の一機関です。カーネヴァイは、かつて不法投棄のゴミが捨てられるようなところだったそうですが、1980年代、ハワイ大学の学生たちがタロイモが生えていることを見つけたことをきっかけに、タロイモ畑が復活しました。



図4：タロイモ畑の前で、泥のついた足

この施設に入るときも、スタッフのハワイ大学の学生たちと「オリ」を交わしてから迎え入れてもらいました。ハワイの神話によると、タロイモと人間は兄弟と認識されています。ハワイの民族にとって、タロイモは神聖な食べ物で、タロイモを作り育てる畑に入るときは心を清くして入らなければいけないと教わりました。カーネヴァイでは、まず、タロイモ畑の水の源泉である溪流を散策し、川の水が畑にどのように引き入れられているのかを観察しました。畑の周囲には、サトウキビ、ウル、マンゴー、竹なども植えられていました。その後、実際に、田んぼの中に足を入れてみると、バナナの皮や木の実、たくさんの落ち葉など肥料として入れられていて、引率教員のもう一人（内川）は、ハワイ社会を象徴しているように考えました。

4 日目は、車で遠出をして、ノースショアのライエ (Laie) に、ポリネシアカルチャーセンターを訪れました。このセンターは、非営利団体が運営する文化観光施設というか、ポリネシアの文化を紹介する大きな施設で、隣接するブリガム・ヤング大学ハワイ校の学生たちがスタッフとして働いています。私たちには、日本からの留学生 2 人（光さんとサウルさん）が付いて、敷地内のツアーをコーディネート、リードしてくれました。広い敷地内には、ハワイ、タヒチ、フィジー、トンガ、アオテアロア（ニュージーランド）、サモアの文化を紹介する施設があり、様々なショーやアトラクションを通じて、歌や踊り、生活、言語などを体験できるようになっています。私たちは、タヒチダンスを鑑賞したり、タトゥー体験、カヌーを漕いだり、ココナッツに矢を刺すゲームをしたりしました。

ポリネシアカルチャーセンターまでは 1 時間ほどのドライブだったのですが、通り道のパリ展望台 (Pali Lookout)、また、ホオマルヒア植物園 (Ho‘omaluhia Botanical Garden) に寄ることもできました。ホオマルヒア植物園では、ホクレアの帆に使われているハラの木とその葉に触れることができました。植物園を出発した後、ワイアホレ (Waiahole) のハワイ料理の弁当屋「ポイファクトリー」にも立ち寄りました。「ポイ (poi)」とは、蒸したタロイモを潰して食べるポリネシア諸島の伝統的な主食です。ポリネシアカルチャーセンターでは、ポイを作る様子を見ることもできました。

5 日目には、ビショップ博物館を訪れ、ハワイの歴史について駆け足で復習しました。それまで、4 日間かけて「生きたハワイ」を体験したわけですが、からだと心で学んだことを、今度は頭の中で整理しなおす時間でした。すべての展示にハワイ語と英語の解説がつけられていたのが、当たり前と言えは当たり前のことなのですが、とても印象的でした。午後は、ノースショアに足を伸ばし、アザラシが日光浴するモクレイア (Mokulē‘ia) のビーチでゆっくりしてから、夕方のハレイヴァ (Hale‘iwa) でシェイプアイスやアサイボールを食べてから帰りました。

## おわりに ハワイアン・ルネッサンスとは

今回の旅は、「ハワイアン・ルネッサンス」と呼ばれる文化復興運動を訪れる旅でした。その運動が盛り上がる上で、ホクレアが大きな役割を担ったことはすでにも書きました。1970 年代には、実は他にもいくつものことが起きて、あちこちでこの運動に火をつけました。「カラマ谷の抵抗 (Kalama Valley Protests)」と知られる先住民の土地への権利を主張する運動や、海軍の爆撃練習場となっていたカホオラウェ (Kaho‘olawe) 島の返還を求める訴訟運動も、1970 年台に始まった大きな動きです。「カヒコ (kahiko)」と呼ばれる伝統的スタイルのフラやオリの復活、あるいはハワイアンミュージックや伝統的クラフトアートが注目されたことも、ハワイアン・ルネッサンスの引き金であり、成果であると言えるでしょう。1980 年代には、ハワイアンイマージョン教育も始まり、学問としてのハワイ学も広がり、深まりました。

1970 年代のそういった一連の運動は、「第二次ハワイアン・ルネッサンス」とも呼ばれています。「第一次ハワイアン・ルネッサンス」とは、その 100 年前にカラーカウア (Kalākaua) 王やリリウオカラニ (Lili‘uokalani) 女王の時代に起きた文化復興運動のことを言います。21 世紀に入ってから、「第三次ハワイアン・ルネッサンス」が起きていると言う人もいれば、ハワイの文化復興は止まることなく毎日起きているのだ、と言う人もいます。1980 年代にハワイで 3 年間暮らした小貫からすると、40 年の時を経て再会するこの運動は、目を見張るほど成長していて驚かされることばかりでした。

引用文献

‘Aha Pūnana Leo. “Our History,” <https://www.ahapunanaleo.org/history-hl-1> (Accessed on January 25, 2026).

Hawai‘i State Department of Education. “Hawaiian Immersion School,”  
<https://hawaiipublicschools.org/enrolling-in-school/hawaiian-immersion-school/> (Accessed on January 25, 2026).

**Abstract**

**A Journey to the Hawaiian Renaissance**  
Report of Global Study Tour A, School of Global Studies, Tokai University

Sayaka Uchikawa, Daisuke Onuki

As part of the Global Study Tour courses that we offer at the School of Global Studies, Tokai University, we visited O'ahu Island in Hawai'i and spent five days (February 17-22, 2025) observing the ethnic movement known as the "Hawaiian Renaissance." Ten students participated accompanied by two faculty members (Onuki and Uchikawa). This trip was the second tour of a series of the courses exploring "Indigenous Languages, Cultures, and Revival Movements," following the previous year's "Journey to Nibutani (Hokkaido) to Experience Ainu Culture" (January 24-27, 2024).

Before departure, we learnt the brief history of the Hawaiian Renaissance and a few words of Hawaiian language. The Hawaiian Renaissance was a movement aimed at reclaiming the pride, culture, and language of the Hawaiian people. One catalyst for this movement in the 1970s was the Polynesian voyaging canoe named Hōkūle'a. Hōkūle'a is a catamaran (double-hulled canoe) that navigates without any instruments like compasses, relying solely on natural cues such as the movements of the stars and sun, and changes in waves and wind. This journey of ours was planned primarily to meet Hōkūle'a.

During this trip, we also encountered a significant term: "Āina-Based Education." Education that solely focuses on the mainland defines those living in Hawai'i as peripheral. Āina-Based Education, we felt, is grand endeavor: intuitively sensing the energy from the Hawaiian land, inheriting the wisdom, abilities, and community nurtured there, and then returning the knowledge back to the land and its people. Our students seemed deeply impacted by this concept. On the third day, we visited a Hawaiian immersion school, Ānuenue School, where all subjects (except English) are taught exclusively in Hawaiian language. Then, we spent the afternoon visiting the Kānewai taro patch at the University of Hawai'i at Manoa. On the fourth day, we took a long drive to visit the Polynesian Cultural Center in Laie on the North Shore, and on the fifth day, we stayed at the Bishop Museum to reflect on our journey to the Hawaiian Renaissance.

Some say the "Third Hawaiian Renaissance" has begun in the 21st century, while others maintain that Hawaiian cultural revival is an ongoing everyday event. For Professor Onuki, having lived in Hawai'i for three years in the 1980s, reuniting with this movement after 40 years was nothing but astonishing, filled with remarkable change.